

連続的な行為描像と行為意味集合 ——ファジイ集合による行為意味の定式化——

都 築 一 治

【要旨】

本論は、合理的選択理論が前提とする行為像を、現象学的社会学が措定する行為像と対照するかたちで明確化し、その基底的な仮定を拡張して、合理的選択理論が扱いえない現象を記述する枠組みを与えることを目的としている。

合理的選択理論が前提とする行為は、ほとんどの場合、自然的な分節を持つ意味の明確な単位行為に限定されており、複数の意味合いを持つような、あるいは不確かな意味づけを持つような、分節の不明な行為を想定していない。意味の明確な単位行為の概念を、ファジイ集合を用いて拡張することで、こうした制約を逃れることができることを示すと同時に、現象学的社会学が想定する行為像の数理的な定式化を試みる。

キーワード：合理的選択理論、単位行為意味、ファジイ行為意味集合

1 合理的選択理論への批判

否定的ニュアンスを含むかどうかは別として、「合理的選択理論」は現代社会学の強力な理論枠組みのひとつとして認知され、評価されてきている。¹⁾ しかし、＜現実の個人はそんなに合理的でない＞といった繰り返し表明される根深い懐疑に加えて、いくつかの疑義が提起され、それを巡る論争が行なわれてきていることもよく知られている (Coleman and Fararo, 1992)。ここでは、たくさんある論点のうち、(1)行為の非合理性と、(2)単位行為の同定問題を取り上げて、何が問題なのかを明確にしよう。

1.1. 行為の非合理性

行為の非合理性にまつわる合理的選択理論への批判は、多岐にわたる。このうち、合

理性を妨げ非合理的な結果をもたらすものとして引き合いに出されることの多いのは、「知識の不足」や「感情の存在」である(Elster, 1989)。これらに対して、盛山(1992, 1997)は合理性や効用の概念を整理・拡張し、多くの非合理とされる行為を合理的行為の範囲に収めることで、合理的選択理論を擁護する論述を展開している。また、佐藤は「…合理性の仮定を外すならば、人間行動に関していかなる原理を設定すればよいのだろうか。もし何の原理も設定しないままに社会現象を説明しようとする、説明が現象ごとにアドホックになる危険が生じる。」²⁾(佐藤, 1991: 264)のように、現状では合理性の仮定は理論構築の上で好ましい性質を持っていること。また、合理性仮定そのものを問うことは社会科学研究への批判としては不適切であり、合理的選択理論の経験的妥当性こそを問うべきであるとして、これを退けている(佐藤, 1998a: 22-28)。

「知識の不足」や「感情の存在」などを、合理的選択理論の枠組みに引きずり込もうとする試みは、一定の成果をあげているといえる。しかし、仮にいくらかの非合理的要素が合理的選択理論の枠内に落ちたとしても、合理的選択理論が非合理的要素を取り入れたことになるのだろうか。

たしかに、盛山が言うように「合理性や効用についての常識的な概念」を変更することで、これらの要素の多くを合理的選択理論の枠内に収めることはできるだろう。しかし、それら要素は行為者の中で合理的に処理される限りで、すでに合理的な要素なのであり、合理的過程から独立した非合理的要素をモデルに取り込んだことにはならない。定義上、非合理的要素は合理的に処理できないからこそ非合理なのであり、合理的選択理論が非合理的要素を扱うことには、おのずから原理的な限界がある。

しかしながら、非合理的要素を個々のモデルに恣意的に介入させるだけでは、佐藤の指摘するように、つねに説明がアドホックになる危険が付きまとうことになる。つまり、非合理的要素の行為への関わりをそれとして合理的選択理論に対置させるためには、非合理的要素の規則的な関わりをモデル化し、これを制御しなければならない。しかし、合理的選択理論への批判者は、必ずしもこれに成功しているとはいえない。

非合理的要素を合理的選択理論に内部化するにしても、外付けするにしても、非合理的要素の占めるべき正当な位置をそこに見出すことは難しい。非合理的要素の占めるべき位置を確保するには、非合理的要素の行為への関わりを論理整合的に説明するという、一見、論理矛盾するような課題——ただ、これが論理矛盾するという見方の背景にはウェーバーの社会的行為の定義に見られるような合理主義的偏向³⁾が作用している可能性がある——を解かなければならない。その過程で、合理的選択理論を特殊ケースとして含むような理論的基盤を構築し、特殊ケース以外の部分に非合理的要素の収まるべき位置を見出す必要がある。

1.2. 行為論の幻想？

ところで、盛山は合理的選択理論を擁護する一方、その問題点として、道具立てが恣意的に選ぶうために説明がアドホック性の危険をはらんでいること、特殊な場合を除いては、ゲーム理論に依拠して行為の具体的な決定はできないこと、などを指摘している(盛山, 1997)。これらの指摘は、むしろ合理的選択理論の可能性を評価しようとする中で提起されたものだが、彼はさらに、合理的選択理論の基盤となる方法論的立場——方法論的个人主義に対する疑念を表明するなかで、徹底した否定的批判を行なっている(盛山, 1995)。これは厳密には合理的選択理論への批判とは言えないが、意味を持った行為を選択する契機を含むすべての理論的立場への問題提起であり、合理的選択理論も例外ではない。⁴⁾

彼は、A. Schutz が「持続の流れ」「位相的に構成される経過」「持続流としての行為経過」とよぶ事態を、「行為者の行為は連続する生の流れの中にある」(ibid.: 199) と表現し、ひとまとまりの行為を特定する自然的な分節がないこと、さらに行為の意味も「それを問題視する『問いの地平』に100%依存している。」(ibid.: 206)、したがって、あたかも自立した単位、自立した意味をもつような行為を前提とした行為論は成り立ちがたい。「客観的に同定したり差異化しうる諸行為とそれら固有の、主観的であれ客観的であれ、意味というものの存在を前提とする行為論という社会学の構想は、まるっきり幻想でしかない」(ibid.: 206) と言うのである。

彼の行為認識は、A. Giddens が「行為は『生きられた経験』のよどみない流れのなかにある。そのような行為を個々別々の部分や『断片』にカテゴリー化する場合、それは、その行為者の注意の反照的過程、ないし他者のまなざしに依拠するのである。」(Giddens, 1976: 訳103) と述べるところとも、ほぼ共通しているように思われる。しかし、Schutz や Giddens はこの性質があるために、行為論に致命的な欠陥があると考えてはいない。むしろ、この前提の上に行為論を組み立てようとしているのであり、それを「幻想」とする認識を共有するものではない。

ただし、選択可能な行為集合を想定し、その要素としての行為を計算合理的なプロセスのもとで選択するという構成をとる合理的選択理論(Elster, 1989、盛山, 1997)においては、盛山が指摘する行為論の不可能性が、より純粋なかたちであらわれていると見ることができる。選択肢集合の要素は、客観的に明確に意味の定まった単位行為であると想定されており、Schutz や Giddens が想定する「『生きられた経験』のよどみない流れ」と「投企」もしくは「反照的過程」によって画定された行為という考えとは、はっきりと異なっている。

合理的選択理論における行為集合の要素としての単位行為は、「…ヴェーバーは『行為』のもとに物理的事象を考えていないこと、したがって具体的個人が行なう身体動作のようなものを考えていないことは明らかであり、他方この個人がこの身体的動作に『結び

つけている』意味は、[この身体的動作と]奇妙に予定調和した形で歩調を合わせていることも明らかである…」(Schutz, 1932; 訳56) という指摘が妥当するような、本来可変的な要素を狭く固定した、いわば限界的な特殊ケースであり、合理的選択理論はそのごく限られた領域において「…現象の一部を切り取ってある種仮想的に考えられた理念的世界——そこでは、人々の一次理論を限界的には無視しうると考えて他の点において有意義な側面を切り取ってきていると考えられる——を探索するのに、非常に力のある戦略だというべきなのである。」(盛山, *ibid.*: 220) と、評価されるのが相応しいのかもしれない。

ここには、先に述べたような、合理的選択理論を特殊ケースとして含むような行為論の発想がある。だが、明確な分節や意味をもつ行為と、持続流としての行為という2つの描像はあまりに隔たっている。また、現象学的社会学が提起する行為像が、合理的選択理論と同じような論理的明晰さでは記述されてはいないことも、両者を比較する上で障害となっている。そもそも現象学的な行為概念の数理的記述が可能なのかといった疑問はおくこととして、ここでは2つの行為像をさらに詳細に検討する中で、その可能性——つまり合理的選択理論が仮定する行為像を一般化する形で、Schutzらの行為の描像に近づける可能性を探ることにしよう。

2 単位行為の構造

合理的選択理論が想定する選択肢としての行為は、それによって現実の社会状態がたちづくられるという点で、関係する行為者に何らかの物理的影響を及ぼすものであり、さらに、その社会状態に各行為者の効用が割り振られるという点で、特定の効用値を指定するような一義的な意味を行為者によって付与されたものだといえることができる。言いかえると、その行為は「人々のとる行動(行為の外的過程)」と「人々がそこに含ませた意味」の2つがペアとなって構成されていると見なされるようなものである。

さらに、この行為の意味は、きわめて明瞭な場合がほとんどである。ゲーム理論的な定式化では、場面を問わず、多くの場合に<協調><裏切り>という意味が付与され、分析されることがある。少なくとも、「選択可能な行為の選択肢集合 $S = \{S_1, S_2, \dots\}$ 」(盛山, 1997: 144) のように、研究者によってラベルづけができるようなものであることは間違いない。

すなわち、合理的選択理論が想定する行為は、(1)行為者の作り出す物理的状況に、(2)単一の行為意味(ラベル)のついたものであり、これを、ここでは「意味の明瞭な単位行為(well-defined unit act)」と呼ぶことにしよう。このとき、行為者の作り出す物理的状況の集合と、「単一の行為意味」(以下、単位行為意味と呼ぶ)の集合は全単写の関

係にあり、両者はいわば分かちがたく結びついている。

しかし、行為者が作り出す物理的状況と、行為者がそこに含ませる意味との結びつきは、疑いの余地がないほど明瞭なものとは限らない。「(1)本人の思い込みや本人が認めない動機が働いて、自分自身の行為の目標の真実の連関を隠すことがある」(Weber, 1922: 訳17) というような、行為者自身が自らの行為の意味を十分認識しない場合や、「(2)行為の外的過程が私たちに同じように見え、似たように見える場合でも、単数或いは複数の行為者にとっては、大変違う意味連関が根本にあることがある。」(ibid.: 訳17) のように、行為の観察者と行為の当事者の解釈が異なることもありうる。

ただ、これらの事柄は、ある行為者の中でひとつの物理的状況にひとつの単位行為意味が対応している限りでは、「意味の明瞭な単位行為」の仮定にとっては大きな問題ではない。「真実の連関」や行為者による解釈の相違が、選好順序や効用関数の中に織り込まれさえすれば、合理的選択理論による定式化に支障はきたさない。問題が生じるとすれば、ひとつの物理的状態に単位行為意味が何も結びつかない、あるいは複数の単位行為意味が結びつく場合である。ここで、意味の明瞭な単位行為の概念をいくぶん拡張して、単位行為 (unit act) を定義することにしよう。

行為者の作り出す物理的状況に、任意の数の単位行為意味が結びついている様相を記述するには、行為者の作り出す物理的状況を記述するパラメータ・ベクトル B に、任意の数の単位行為意味を要素とする行為意味集合 A が組になっているとした方がよい。行為意味集合 A は、すべての単位行為意味の集合 (以下、単位行為意味の全体集合 X) を全体集合とする部分集合であり、ここで単位行為意味とは、行為を記述した文言を指している。

このような概念化のもとで、単位行為は行為意味集合と物理的状況を記述するパラメータ・ベクトルの組 $\langle A, B \rangle$ として定義される。この定義のもとでは、行為者が作り出す物理的状況の集合と単位行為意味集合は全単写とはならない。したがって、意味の明瞭な単位行為を想定した分析はやや制約されるかもしれない。しかし、形式上の取り扱いはやや複雑になるが、行為意味集合 A に同時に含まれる可能性のある複数の単位行為意味をつなげてひとつの記述とし、それを単位行為意味として再定義すれば、合理的選択理論の論理構成は、まだ支障をきたすことはない。

3 「よどみない流れ」の記述

先にみたように、「意味の明瞭な単位行為」の自立的な存在を否定しようとするのが盛山の主張であった。それでは、行為の同定をすべて行為者自身の投企あるいは反照的過程に還元することができるのだろうか。盛山は「『問いの地平』に100%依存」として、

この問いに yes と答えている。しかし、「行動的実在を問題視する視点」に相関的に行為の意味が同定されるとしても、「連続する生の流れ」が「視点」によってどのようにでも解釈されることになるのだろうか。

人が「生の流れ」を構成するとき、あらかじめ明確な行為意味に区切られた単位行為を数珠繋ぎのように紡いでいるのではないかもしれない。しかし、「生の流れ」はその分節や解釈を無制限に「視点」に依存するように構成されているのではなく、それらをあらかじめ制約するような何ものかによって制御されている、と考えることはできないだろうか。

ある時空間に埋め込まれる「生の流れ」が、「問いの地平」や「反照的過程」に全面的に依存してどのようにでもあり得る、というのが行き過ぎであるのは、次のような事例からもわかることである。たとえば、大阪行きの東海道新幹線に乗っていた人の行為を、「仙台に向かっていた」と意味づけることは、不可能ではないにしてもかなり難しい。また、木を切っていた人の行為が「運動不足解消」と同定されることはあっても、「水泳をしていた」と同定されることはなさそうである。

行為者は、時空間に「ある物理的状況」を作り出しつづけており、それは行為の同定や行為意味の同定に制約を与える。そして、そうした制約がどのような機制によって作り出されるかを問うことは、「行為論」として意味のある作業だと考えられる。行為は完全に主観的なものでもなければ、合理的選択理論が想定するような完全に客観的なものでもない。その中間に、「行為論」が取り扱えるようなかたちであると考えられる。

3.1. ファジイ行為意味集合

このように問題を考えていくとき、「単位行為」の連鎖という描像と、「よどみない流れ」の像を接合しようとする、先に定義した行為意味集合の性質が障害になる。行為意味集合の要素は、単位行為意味である。時間経過にともなって特定の要素がそこに含まれるか否かが変化し、行為の物理的状況が制御されるとすれば、必然的に時系列上に不連続を生じさせてしまう。

行為者が作り出す物理的状況にはもともと自然的な区分がないので、これを連続化することは容易である。しかし行為意味集合 A についていうと、通常のクリスプな集合では、要素はその集合に属するか属さないかのいずれかであり、その交代が生じるとすれば、数珠繋ぎのような不連続は避けえない。ある単位行為意味が行為意味集合に含まれる場合を 1、含まれない場合を 0 とあらわし、時系列のある時点で、それまで含まれていなかった要素が含まれるようになったとすれば、その移行は図 1 のようにあらわすことができる。

しかし、行為の物理的状況を制御する行為意味の連続的な変化を記述するためには、図 2 のように、要素が集合に属す度合いを連続的に変化させなければならない。こうし

図1 クリस्प集合における要素の包含

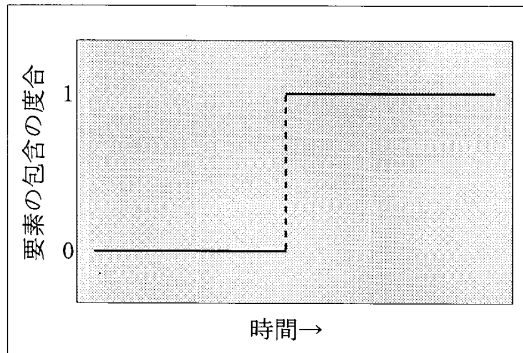
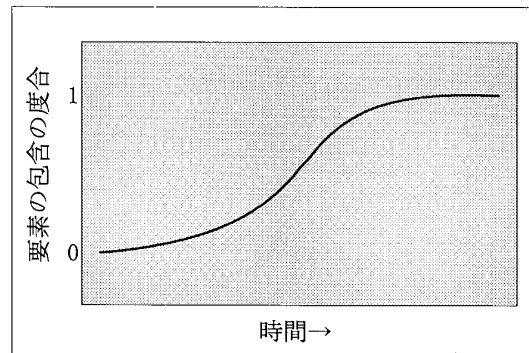


図2 ファジイ集合における要素の包含



た性質を持つ集合は、ファジイ集合である。ファジイ集合では、要素が集合に属す度合いが0から1までの実数値（これをグレードという）であらわされ、この値を決めるメンバーシップ関数がこれを特徴づけている。グレードが0ならばその要素は集合に属さない、グレードが1に近づくほど集合に属する度合いが高くなるのである（水本、1988、中島ほか、1994、洲之内、山下、1995などを参照）。

以下提案するのは、「よどみない流れ」を描写するある方法であり、これだけが唯一のものであると主張するつもりはない。上のような考えに基づき、ファジイ集合として、行為意味集合を定義してみよう。

3.2. 行為意味集合の再定義

ファジイ集合は、次のように定義される。「『ファジイ集合 (fuzzy set)』は、全体集合 X におけるファジイ部分集合 A が、メンバーシップ関数 (membership function) μ_A によって特徴づけられる集合として定義される。

$$\mu_A : X \rightarrow [0,1] \text{ (洲之内, 山下, ibid.: 3)}$$

ここで、単純に先の行為意味集合をファジイ集合に置き換えるだけでは、うまくいかない。クリस्प集合としての行為意味集合は、明確な分節を持つ単位行為の想定のもとに定義されている。しかし、ここでは「流れとしての行為」の行為意味集合を、ファジイ集合として定義しなおそうとしているからである。そこで、「流れとしての行為」を微小時間 Δt で静止させ、ここにファジイ行為意味集合を定義することにしよう。⁵⁾

定義：微小時間 Δt におけるファジイ行為意味集合 ΔA は、単位行為意味集合 X を全体集合とするファジイ部分集合であり、メンバーシップ関数 μ_A によって特徴づけられる。

単位行為意味集合 X の要素は、行為を意味づける文言（たとえば、「木を切る」「出張へ行く」など）であった。行為や行為意味の同定が行為者自身の投企に依存して行なわ

れるとしても、行為プロセスを研究者が理論化する場合には、いずれにしてもいずれかの時点で、研究者自身が行為者に代わってこれらを同定する必要がある。単位行為意味集合は、この意味で研究者がその研究関心に対応して設定するものである。単位行為意味集合の要素である任意の単位行為意味 x は、メンバーシップ関数 μ_A によってファジイ行為意味集合 ΔA に属する度合い（グレード）が決められており、この度合い： $\mu_A(x)$ を、ここでは単位行為意味密度と呼ぶことにしよう。

ここでも、ある微小時間 Δt における行為意味集合 ΔA は、行為者の作り出す物理的状況 ΔB と組になって、行為の位相（あるいは局面） $\langle \Delta A, \Delta B \rangle$ を構成すると仮定する。 ΔB は、 Δt における行為者およびその周囲の物理的状況をあらわすパラメータ・ベクトルであり、行為意味集合 ΔA によって制約を受けつつ構成され、逆に事後的な反照的過程を制約する。ただし、事後的に反照的過程によって行為が再構成される際には、行為意味の同定は、行為の幅⁹⁾ に関してメンバーシップ関数を総合したものから、あるていど独立に行なわれると考える。

4. 合理的選択理論への制約

このように単位行為概念を拡張すると、合理的選択理論の枠組みでこれを十分に扱うことは困難になると考えられる。以下、どういう問題が生じるかを考察することになよう。ただし「問題」は、同時にあらたな課題の提示でもある。

4.1. ファジイ行為意味集合による行為の制御

行為の物理的状況を制御しようとするとき、合理的選択理論が想定するような、行為の意味を明確に意識した不連続な選択、というかたちをとる場合もあるだろう。行為の連鎖は常に数珠繋ぎではないかもしれないが、ところどころは数珠繋ぎであっても構わない。その意味で、クリスプな行為意味集合の仮定にも意味がある。

しかし、行為者自身が明確に意識しない形で連続的に単位行為意味の強度が入れ替わり、それによって行為の物理的状況がコントロールされる状況があるとしたら、その状況はクリスプな行為意味集合によっては記述困難であり、ファジイ行為意味集合はそうした状況を記述するひとつの方法ではある。

要素（単位行為意味）が行為意味集合に属する度合いを単位行為意味密度であらわすことができるということは、単位行為意味が行為の物理的状況を制御する強度を可変的なものにできるということと関わっている。単位行為意味が行為の物理的状況をコントロールするとき、ある単位行為意味密度が小さく、そのコントロールの強度が小さいほど、それは行為者の無意識的な過程を通じて行なわれると考えることもできる。その意

味で、単位行為意味密度は、単位行為意味が意識化される度合いを表現しているといえることができる。

4.2. 複数の単位行為意味を含むということ

また先にみたように、行為意味集合には複数の単位行為意味が属することがある。ファジイ行為意味集合を前提としたときには、むしろ複数の要素が属している状態が常態であるということもできる(要素が属していない状態すら、「その単位行為意味は、行為意味集合に、単位行為意味密度0で属している」と表現できる)。

しかし、クリस्पな行為意味集合を前提としたとき、実際には複数の単位行為意味が属することに積極的な意義を見出すことは困難であり、合理的選択理論の枠組みの中でも、結局それらをひとつにまとめて、意味の明瞭な単位行為の仮定を維持することができた。しかし、複数の単位行為意味が異なる度合いで属すファジイ行為意味集合を仮定することで、ある実質的な理論的問題を提起する可能性がある。

ここで、ゲーム理論における混合戦略との違いを確認する必要がある。混合戦略においては、戦略は事前に確率的に混合される。しかし、プレーヤーが戦略を選ぶ段階では、それぞれひとつの戦略が現実化し、これにともなう社会状態が現出し、利得が確定される。この利得は、戦略が選ばれる前に計算された期待利得とは一般に異なっている。ゲーム理論における最適戦略は、このような事前の期待利得計算に基づいて定義されている。

これに対してファジイ的な行為意味の混合は、行為者同士が行為の物理的状況を構成し合ったあとでも持続している。2人の行為者がそれぞれ2つずつの単位行為意味の混合した行為状態を取りうるとしたら、 $2 \times 2 = 4$ 通りの単位行為意味の組み合わせが同時に生起すると考えることができるのである。

これは、同時に、複数の社会状態が、異なる強度で生じる、と想定できることを意味する。ある行為状況に1つの行為意味しか対応していなければ、定まる社会状態の意味も1つに定まるだろう。しかし、たとえばある仮説構成のもとで、2人の行為者それぞれの行為状況に2つの行為意味が対応しており、それぞれの単位行為意味の強度が(1.0, 0.5)であったとすれば、4つの社会状態がそれぞれ(1.0, 0.5, 0.5, 0.25)の強度で同時的に生ずる、といった事態を記述することもできるのである。

こうした仮説構成を行えば、付与された意味の強度というパラメータを明示的に扱うことができる点でメリットがある。しかし、これをあくまで複合的な意味を持つひとつの社会状態が生じたとして処理することも可能ではある。しかし、複数の単位行為意味が関与するという事は、相反する単位行為意味が同一の行為状況に付与されているといった現象を扱う可能性があるということであり、これは生起する現象の意味的境界をぼかす効果をもつかもしれない。それは、次のような事態である。

ふつう、ある「…という行為」という行為意味が主題化されるときには、必ず「…でない行為」という行為意味も、同時に主題化されていると考えることができる。したがって、少なくとも研究者が設定する単位行為意味の全体集合 X には、この両者が常に含まれており、ファジイ行為意味集合にはこの両者が同時に属すものとして分析される必然性がある（もちろん、どちらか一方の単位行為意味密度は0か、限りなく0に近いかもしれない）。

こうした相矛盾する状況を常態として扱うことができることは、「…という行為だが、…という行為ではない」というアンビバレンスを明瞭なかたちで概念化できる可能性に通じている。そして、このようなアンビバレントな行為の相互作用の結果として社会状態が生じるとすれば、その社会状態は、関与する行為者にとっても、あるいは研究者にとっても、明確な意味的輪郭を持たないものになるかもしれない。これはデメリットのようにも思われるが、逆に、合理的選択理論のもつ『行為の合理性』という強烈なニュアンスを含んだ仮定への違和感（盛山，1997：138）を、数理的な枠内で処理する可能性を開くかもしれないのである。

4.3. 計算合理性への制約

上のような行為の定義がゲーム理論的な定式化と相容れない部分は、計算合理的なプロセスを制約する点にもあらわれる。先に述べたように、何らかの程度において、単位行為意味の密度（グレード）が、行為者が行為選択を意識化する度合いに関わっているものであるとすれば、付与される単位行為意味密度が小さな場合、行為意味が行為者の作り出す物理的状況を意識的なプロセスによって制御していると考え難くなる。これは、意識的な計算に基づく合理的メカニズムの作動を制約する。

たしかに、計算合理性は必ずしも意識的なプロセスでのみ働くと考えする必要はないかもしれない。しかし「選択」という契機は、多かれ少なかれ意識的な対象の取捨というニュアンスを含み、「計算」は自らの選好と目の前にある状況の、明確で冷静な判断という意味合いをもっている。ここに、意識化されないかもしれない要素の介入を許すことは、少なくとも、われわれがイメージするものとはかなり異なるメカニズムとして、「選択」を捉えなおす必要を生じさせる。

また、意味の明瞭な単位行為を前提としてすら、果たして合理的選択理論が提示するような期待利得の計算過程が働くのか、といった疑問を呈することが可能なのに、行為意味集合に含まれる複数の単位行為意味の密度をすべて冷静に計算に組み入れる、といった行為者像を描くことは、不可能ではないにしてもかなり難しい。まして、相反する単位行為意味が同時に行為の過程を制御するといったアンビバレントな状況を含むるのである。ここで「計算」は単線的な処理ではなく、相互に依存し合う複雑な並列処理であり、意識的な操作として人々がそれを行なっているとするのは、われわれの常識

に反している。

計算合理性は、むしろある限界的なケース——関与する行為意味が少数で、そのグレードが1に近い場合——において働さうる特殊な原理であって、ほとんどの場合——いくつもの単位行為意味が関与し、その単位行為意味密度が0から1までの中間的な値をとるとき——に働く行為制御のプロセスを、おそらくは別に考える必要があるだろう。それは、意識的な選択という機制を極限において含みつつ、多様な意識レベルにおける行為の様相を規定する動的な過程である。

4.4. 行為の非合理的要素の作用

すでに述べた通り、行為の非合理的側面を認めるとしても、それがどの場面でのどのようにあらわれるのかを理論的に特定できなければ混乱をもたらすだけである。理論外在的な要素が、理論の拘束に逆らって、いつでも働く余地を認めることになるからである。行為に非合理的側面を認めるとするなら、それは理論内で論理的に処理されなければならない。これに対して、上の2つの項でとりあげた事柄は、非合理性を行為論にどう組み入れるかという問題へのひとつのアプローチである。

先に見たように、ファジイ行為意味集合の概念を導入することは、現象学的社会学が描写する行為像を記述し、意味の明瞭な単位行為をその特殊ケースとして位置づける仕掛けとしての意味を持っている。行為意味の連続化には、要素が集合に属する度合いを連続的に措定しなければならず、上の議論の範囲でこれは必然的な措置である。

しかしさらに、ファジイ行為意味集合によって、非合理的要素は攪乱による合理的過程の偏向といった位置づけではなく、アンビバレントで意識されない意味による行為の制御といった位置づけを、明示的に獲得する可能性を開かれることになる。そもそも、「よく考えない」「明確に意識しない」ゆえの非合理性というものがありうるとしたら、そうした非合理的過程を理論的に記述することができるかもしれないのである。

5. 結語

だが、こうした定義のもとにモデルを組み立てるには、もうひとつクリアしておかなければならない大きな課題がある。それは、こうして構成される行為が、他者の行為と相互作用するメカニズムを定式化する作業である。現象学的社会学が、実際の社会的行為の分析手段として弱い点もそこにあり、他者の問題、他者の行為の解釈や、相互行為・集合的行為の形式について、主観主義に陥らないような方法を整備しなければならない。

上の定式化にしたがえば、行為意味集合のもとに行為の物理的状況が編成されるしかた、その物理的状況が相互作用するしかた、さらに、それが行為意味集合にフィードバ

ックするしかたなどをフォーマライズする、といった膨大な作業を含む。こうした作業を行なうなかに、恣意的要素を次々と投入して、いたずらにメカニズムを複雑にしては元も子もない。残念ながら、現時点では、この作業の見取りを描くことすらわれわれの手に余る。

この課題への取り組みは別稿に持ち越すとして、最後に、数理的な装いをまとった上の論述について、これが数理社会学の研究でないことを、あえて断っておくことにしよう。これが数理社会学の研究でない理由は、デリベーションに欠けている点に集約される。仮定群から、数理的な手続きによって命題を導出したり、定理を証明したりすることは、数理社会学にとってそのアイデンティティの核となる戦略的特質である。これを欠いて数理社会学の研究とはいえない。上の分析は、仮定群を提示するにとどまっており、社会現象を演繹的に導けるものではない。

ただ、われわれはこの論考に「比喩としての数理」という位置づけを望むものではない。ここでは、行為概念の拡張にとって、ファジイ行為意味集合の仮定は、ある見方からすれば必然的なものであることを示そうとしている。われわれは、単に人の行動があいまいだからファジイ集合を使うということではなく、現象学的な行為概念を定式化するための必要として、ファジイ集合の導入を図っているのである。

しかし、ファジイ理論の社会学への応用については、「何らかのかたちであいまいさを重視する社会学理論には、まだまだ他にも、役割の多元性を説いた役割セット論（マートン、1956）、多元的現実を展開した現象学的社会学（シュッツ、1980；バーガー＝ルックマン、1977）、などをあげることができるだろう。むしろ、こうした理論が数学理論としてのファジイ理論やファジイ集合の考え方にとって直接的にレリヴァントであるとは思われない。」⁷⁾（高坂、1994：247）というように、本稿の論旨を先取りしながら、にもかかわらず、それに疑念を表明するような立場も存在する。あいまいさを重視するという点でファジイ理論との親近性は予想されてはいるものの、これまで示した論述が現象学的社会学の解釈として妥当なものであるのか、また、ここでのファジイ集合を用いた定式化が、ファジイ理論を用いた社会現象分析の深化の可能性をうまく捕らえているのかなどについて、われわれも多くの疑義が提起されうると考えている。

そうした疑念を現実のものとして受け止め、それに答えていくためにも、残された課題を解決し、ここに示した「構図」のもとに、実際に絵を描いていくことが必要なのであろう。つまり、具体的な現象をモデルによって説明して見せることである。それは、さらに遠い課題として残されている。

注

- 1) その枠組みに基づく数多くの研究成果、それを掲載する学術誌の存在、主要な学派との位置づけのもとに論文集が生まれ（Abell, 1991）、それを巡って論争が戦わされ（たとえば、

Coleman and Fararo(ed.), 1992)、入門的なテキスト (Elster, 1989) まで刊行されている (盛山, 1995: 274などを参照)。

- 2) Thaler(1992)は、経済学分野におけるさまざまなアノマリーに触れながら、効用最大化を核とする合理的モデルの限界に論及している。最終的に Thaler が行きついた結論は、「規範理論(normative theories)と記述理論(descriptive theories)の間に明確な一線を画」した上で、規範理論である「合理的な行動モデルを理論的に記述」するだけでは十分でなく、「完全には合理的とは言えない (いわば非合理的) 行動モデルを記述する」理論を探究すべしといった処方箋であり、しかもこの行動モデルは「ごちゃごちゃと込み入ってややこしく、かなり漠然とした予測を提示しがちである。」(ibid.: 訳337) というものである。
- 3) 「…行動の非合理的感情的な意味連関が行為に影響を及ぼす場合、すべてこういう意味連関は、先ず、行為の純目的合理的過程を観念的に構成した上で、それからの偏向として研究し叙述すると非常に明瞭になる。」(Weber, 1992: 訳11-12) という表現からは、「方法論上の手段」と断られていても、非合理的要素を合理的過程の攪乱的要素として取り入れる方向が志向されているように思われる。
- 4) 佐藤 (1998) は、盛山の方法論的個人主義批判に対して「…合理的選択理論は方法論的個人主義の1つの潮流である。」(佐藤, ibid: 145) と位置づけ、合理的選択理論を守る立場から盛山への反批判を展開している。
- 5) この定義は、全体に、流れを微分してそこに各概念を定義するといった構造になっているが、微分・積分といった用法は厳密なものではなく、いわば比喩でしかない。
- 6) 行為の幅とは、Schutz が「単位行為は、意図されて徐々に履行されるべき行為によって実現されるような成果としての行為が、投企されることによって構成される。単位行為は投企の『幅』の関数である。」(Schutz, 1932: 訳83) というときの「幅」に相当する。
- 7) この指摘は、否定的なニュアンスを持つものの、ファジイ理論と社会学理論との関係を考える上で優れた洞察である。なお「役割セット」は、マーソンの著作の翻訳書では「役割群(role-set)」となっている。Set (=集合) を「群」と訳すのは、function (=関数) を「機能」と翻訳しがちな社会学者にとって、理論的仮説を数理的な表現から遠ざける一因ともなっているように思われる。

文献リスト

- Abell, Peter (ed.) 1991. *Rational Choice Theory*. Edward Elgar.
- Coleman, James S. and Thomas J. Fararo ed. 1992. *Rational Choice Theory : Advocacy and Critique*. Sage Publications, Inc. Newbury Park, London
- Elster, Jon 1989. *The Nuts and Bolts for the Social Sciences*, Cambridge University Press, London=1997 海野道郎訳『社会科学の道具箱——合理的選択理論入門——』ハーベスト社
- Giddens, Anthony 1976. *New Rules of Sociological Method : A Positive Critique of*
- 社会学部論叢 第10巻第1号 1999.10 [19]

- Interpretative Sociology*. London: Hutchinson. = 1987(松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法基準——理解社会学の共感的批判——』而立書房。
- Hollis, Martin 1987. *The Cunning of Reason*, Cambridge University Press, London = 1998
 槻木裕訳『ゲーム理論の哲学——合理的行為と理性の狡知——』晃洋書房
- 高坂健次, 1994. 「ファジイ理論と社会学」日本ファジイ学会(編), 1994. 『講座ファジイ⑭ファジイ理論と人文・社会科学』日刊工業新聞社, 241-288
- Lave, Charles A. and James G. March, 1975. *An Introduction to Models in the Social Sciences*, Harper & Row, Publishers, Inc. = 1991 佐藤嘉倫ほか訳『社会科学のためのモデル入門』ハーベスト社
- Merton, R.K., 1949. *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*, Free Press, = 1961、森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房
- 水本雅晴, 1988. 『ファジイ理論とその応用』サイエンス社
- 中島信行、竹田英二、石井博昭, 1994. 『社会科学の数理：ファジイ理論入門』裳華房
- 日本ファジイ学会(編), 1994. 『講座ファジイ⑭ファジイ理論と人文・社会科学』日刊工業新聞社
- 佐藤嘉倫, 1991. 「社会運動と連帯」盛山和夫・海野道郎編著『秩序問題と社会的ジレンマ』ハーベスト社, 259-280
- , 1998a. 『意図的社会変動の理論——合理的選択理論による分析——』東京大学出版会
- , 1998b. 「合理的選択理論批判の論理構造とその問題点」、『社会学評論』, Vol.49, No. 2, 18-35
- Schutz, Alfred 1932. *Der Sinnhafte Aufbau der Sozialen Welt*. Wien: Springer Verlag. = 1982 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社
- 盛山和夫, 1992. 「合理的選択理論の限界」『理論と方法』Vol.7, No.2, 通巻 12, 1-23
- , 1995. 『制度論の構図』創文社
- , 1997. 「合理的選択理論」井上俊他編『現代社会学 別巻 現代社会学の理論と方法』岩波書店, 137-156
- 洲之内治男、山下元(監修・編著), 1995. 『ファジイ情報分析——人間化学へのアプローチ——』共立出版
- Thaler, Richard H. 1992. *The Winner's Curse: Paradoxes and Anomalies of Economic Life*, The Free Press, a division of Simon & Schuster, Inc., New York = 1998 篠原勝訳『市場と感情の経済学：「勝者の呪い」はなぜ起こるのか』ダイヤモンド社
- Weber, M. 1922. "Soziologische Grundbegriffe", in *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen, J. C. B. Mohr = 1972 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店